

---

# ポケモンと一緒に進もう

村雨刹那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモンと一緒に進もう

### 【コード】

N9836Z

### 【作者名】

村雨刹那

### 【あらすじ】

ポケモンと旅に出ているいろいろなものをみたり聞いたりしたい少年の物語

## プロローグ（前書き）

初めての作品です。

おもしろくないかもしれないけど見て下さい

## プロローグ

5年前

あの日、あの時、あの場所で君に会いに行くこと約束した。  
友達がいなかった俺に初めて出来た友達。君のおかげで毎日が楽しかった。水辺で遊んだ、山できのみを採った、ケンカもした。  
だけど、別れはくる

ずっと一緒だと思っていた。

ずっとそばにいたと思っていた

いつか一緒に旅に出ると思っていた

ずっとそばにいられない。別れは突然やってくる。別れたくないが  
また会えると信じて約束した。「いつかまた会う日まで元気だな」

「ラティマス」

# 1歩

「いい天気だ」

俺は、あれからイツシユ、シンオウと旅をした．．．．．

．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．

というのはウソだ！

あれから5年たったけど、旅じゃなく引越した！カツミレとフウロとシロナと知り合いになった。けどまだポケモンを持っていない。今日はワカバタウンに引越してきた。

「ゼノン、荷物を部屋に持って片付けなさい。」

オバサンがなんか言ってるがきこえない

あゝいい天気だなあ

「現実逃避してんじゃないわよ。アンタがめんどくさそうにしてないわけないんだから。」

ゴツ！

頭に衝撃が走った。

「~~~~~ってえ、なにすんだよ、頭痛いんだけどバカな

の？死ぬの？」

「母親にバカはないでしょ 泣かされたい？」顔は笑ってるけど目が笑ってなかった。

「スミマセンでした」ズサー

その場で土下座する俺。母さんを怒らせたらヒドイ目にあうことな  
ど産まれて17年の俺には分かる。あれだけはもうしたくない。

「ハアゝもういいはウツギ博士の研究所にあいさつにいつて来なさい。その間に部屋の片付けをしとくから」

なに！！あいさつに行くだけで片付けをしなくていいだと！？

こんなおいしい話はない！すぐ行かなくては。「あいさつが終わったら早く帰ってくるのよ」「へ〜い」

この時俺は適当に返事をしていたが、ウツギ博士に会うことしか頭になかったのであんな事に巻き込まれるとは思ってもいなかった。

## 2歩

10分ぐらい歩いたら博士の研究所に簡単につくのだが。どうしよう、変なやつが博士の研究所を覗いてる。

まさか!?

博士のファンなのか!?

ここで俺が博士の研究所に行ったら逆ギレされて殴られるかも! どうする? あいさつしてみるか?

「おい。その変な子、何してんだ?」

これでOKだな。完璧だ。

「!?!」

ん?

なんかびつくりしてんなあ。まあいいか

「誰が変な子だ!?! バカにしてんのか!?!」

うわ〜なんか怒ってる。カルシウム取れよ、最近の子どもはこれだから困るんだけど。あ〜ヤダヤダ」

「おい、全部声にでてるぞ!?! つかお前も子どもだろうが!?!」

ありや声にでてたか?

「スマンお前が博士のファンだからあいさつしたただげなんだ」

「誰がファンだ!?! 俺は研究所のポケモンを見てただけだ!?! お前 あっちいけよ。」

なんだ違うのか

じゃあ博士の所に行くか。



ガチャ

「ちやーつす。博士にあいさつしに来ましたゼノンです」  
とりあえず、適当にあいさつした。

奥からよれよれの白衣を着ていた人が出てきた

「おー君が今日、引っ越してきたゼノン君か。初めまして、私が  
ウツギです。」

「どーもです」

初めてあつたがなかなかいい人そうだ

「どうしたウツギ君誰か来ているのかね？」

あつ この人は!?

「オーキド博士。この子は今日引っ越してきたゼノン君です。」

オーキド博士キター

まじでオーキド博士!? 本物だー!! うわっスゲー初めてみた!!

「あつあの俺ゼノンっていいいます。オーキド博士のポケモン講座  
聞いてます。」

「ほっほっほっそうかそうか、君ポケモンは好きかね？」

ポケモンが好き?

そんなの

「大好きに決まっています!!」

俺はいつかまたラティアスとあうんだ!!

そんな俺がポケモンを嫌いになるわけがない。

オーキド博士は目を大きくみひらいたがすぐに笑顔にこう言った。  
「では君にポケモンを渡そう。」

えっ

「ええー」

びつくりした。いきなりポケモンをくれるとは思っていなかったから。

「本当にくれるんですか？」

おもわず声にだした。

「ああ君に僕からのプレゼントじゃ。それとも欲しくないかね？」

「欲しいですー!!」

「ではこれを」

そういつてポケットからモンスターボールを出してきた。

俺それを手にした。

「俺の初めてのポケモン」

小さい声で言ったがオーキド博士には聞こえていたようで

「早くモンスターボールから出してみんか。」「はっはい」

俺はモンスターボールを宙に投げた。

いったいどんなポケモンがでてくるのか

パァーン

「ブイブイ」

出てきたのはイーブイだった

「よろしくイーブイ」  
俺はイーブイにそういった。

## 2 歩（後書き）

感想待ってます

### 3歩

私こと、ゼノンはいままで生きてきた中でも一番嬉しい気持ちになつていた。  
なぜなら…

「ブイブイ」

そう!!

この俺にポケモンをオーキド博士がくれたのだ。

で、ただいま家に帰るためブイブイといっしょに帰っているのだが・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「おい!!お前なんでポケモンなんかもってんだよ!!」

博士の研究所を覗いてたやつに絡まれている。

なんなんだこいつ?俺がブイブイといっしょにいてなにがいけないんだ?

「なあ、なんで俺がブイブイといっしょにいるだけでそんなに怒ってんだ?」

と、聞いてみた。

「そつそれは。」

「それは？」

「お前がポケモンと一緒にいるのが気に入らないんだ」

ええええ

何だよ一緒にいるのが気に入らないってなにこいつ。友達いないのか？

「おい！何だよその可哀想なものを見る目は。」

ヤベ、顔にでてたか？

「いや、友達、いないのかと思って。スマン。」

「てめえ、ふざけてんのか！？」

「ブイ」

なぜか誇らしいげにイーブイが答えた。

「くっ」

そしてなぜ、悔しがる赤髪よ。

「お前、イーブイになにやらせてんだ！！」

「いや、知らねーよ。」

本当になんなんだこいつ？

会うたびにこんなこと言われなきゃいけないんだ。めんどくさ。

「今日はこの辺で勘弁しといてやる。覚えてるよ！！」

そして赤髪走っていった。

「覚えておけて言われても名前ぐらい名乗っていけよ」

「ブーイ」

イーブイもなんだか苦笑気味だ。

「帰るか」

「ブイ」

## 4 歩

「母さん!」

「なによ、帰ってくるなり大声出して何かいい事でもあったの?」

「おう!!オーキド博士にイーブイをもらったんだ。」

「ブイ」

母さんにイーブイを紹介してる。いったいどんな反応するんだろう。

「あら?オーキド博士に犬をもらったの?」

「ブイ!」

「犬じゃねえよ。ポケモンだよ!」

びっくりした。いきなり犬扱いだよ!?

確かにふわふわして、いい毛並みだけどさ

イーブイも犬扱いされてびっくりしてるよ!

「あら、犬かと思ったのよ?それにこの子もアンタになついてるし。」

そういつて母さんはイーブイの頭を撫でる。イーブイもなんだか嬉しそうだ。



「それで母さん！お願いがあるんだ！」

「お願い？」

俺はポケモンをもらったら旅に出ようと思っていた。母さんに反対されてもこの家を出ていくつもりだ。でも今まで母さんに育ててくれたから、母さんに言っておこうと思ったんだ。

「いいわよ。」

ハイ？

「まだ何も言っていないんだけど？」

母さんは呆れながら言った

「何年アンタの母親やってるって思ってんの。顔を見れば大体判るわよー！」

「母さん……ありがとう」

俺は今、母さんの息子でよかったと思ってる。だから感謝した。

「それじゃご飯にしましょうか。」

「おう」

「ブイ」

「ところでイーブイってなにを食べるのかしら？家はポケモンフーズやポフィン何て無いわよ。」

「大丈夫！昔、シロナにポフィンのレシピをもらったことがあるから。それ見て俺がイーブイのために作るよ！」

「あらそう？なら頑張ってね」

それから一時間後

「かんせ〜い」

いい匂いがするなあ〜

イーブイも匂いにつられて足下にやって来た。

「イーブイ。お前のご飯だぞ〜」

イーブイの頭を撫でてポフィンをイーブイの元に置いてみた

「ブイ〜〜」

イーブイはとっても美味しそうに食べている

「よし俺も食べるか。」

そうして、夜は明ける

「それじゃ行ってくるよ。」

「ブブーイ」

「体には気をつけてね。それから怪我のないように。」

「分かってるよ。じゃあね。」

「ブーイ」

「いってらっしゃい」

「いってきます」

こうして俺たちは旅だった。

はずなんだが

「おい、俺とポケモンバトルしろ!!」

赤髪がやってきていきなりバトルをしなくちゃいけなくなった。

ほんとにこいつ友達いないのか？

心配になってきたよ。

## 4 歩（後書き）

次回はバトルをするぞ!!

## 5歩

「俺と勝負しろ!」

「いい天気だなあ」

「ブイ!」

おいおいブイ。なに驚いてるんだ?  
いきなり言われてハイそうですかと、答えるはずないだろ

「おい、現実逃避してんじゃねえよ!」

「フウ」いきなり何なんだよお前。昨日はブイのことで突っ掛かってきたくせに。」

「そ、それはだな。お前がポケモンを持っているのが羨ましかったんだよ!!悪いか!!」

羨ましかったのか。友達がいないんじゃないかなかったんだな。

あれ？

「じゃあなんでポケモンバトルを仕掛けるんだよ。お前ポケモン持っていないだろ？」

「昨日、あのあと手にいれたに決まってるだろーが。バカかお前？」

あのあと手にいれたって、いったいどうやって？

「そんなことはどうでもいい。バトルするのかもしれないのか、どっちなんだ！！」

俺はイーブイに視線を向けた。

「ブーイ、ブイブイブーイ」

イーブイは必死に俺に何かを伝えようとしていた。

「イーブイ、お前バトルがしたいのか？」

「ブイ！！！」

イーブイの目を見るとやる気満々だった。

赤髪に視線をやり。

「いいぜ、バトルする。」

「よし、じゃあ彼処の森でバトルだ」といって俺たちはそこまで移動した

「いけ!!イーブイ!!」

「ブイ!!」

俺にはイーブイしかないからな。  
さてアイツはどんなポケモンをだすのかな?

「出てくる」

そう言ってモンスターボールを上投した。

「ワニワニワニ」

「ワニノコか。」



アイツがだしたのはワニノコだった。  
よしそれじゃ

「イーブイ、体当たりだ！」

「ブイ！」

イーブイはワニノコに向かってはしりだす。

「ワニノコ、かわせ。」

ヒラリ

イーブイの攻撃がかわされた！！  
まずい！？攻撃される

「ワニノコ、ハイドロポンプだ！」

なんだと！？

「ブイ！？」

シーン

あれ？

「おいワニノコ、ハイドロポンプだって言ってるだろ！？早くしろ」

「ワ、ワニ」

もしかして

「なあそのワニノコ、ハイドロポンプ覚えてないじゃないか？」

「あ」

バカだコイツ

「イーブイ、体当たり」

「ブイ」

さっきのようにかわされずちゃんと当たった。

「ワニ」

ワニノコが倒れた。

「卑怯だぞ。こっちはまだ何もやって無かったんだぞ!？」

「なんでだよ」

「ブーイ」

「くそ、ワニノコがハイドロポンプを覚えていたら買ったんだ。その辺、分かってるだろうな!!」

「あーハイハイ、そーだね」

「じゃあな」

そう言って立ち去ろうとする赤髪。  
あっそういえば

「なあ名前なんて言うんだ？ちなみに俺はゼノンだ。」

赤髪はこちらに振り返り

「カズキだ、覚えておけ」

そう言って走り去っていった。

「戻れイーブイ」

イーブイをモンスターボールに戻して今度こそ旅にでた。

だが、俺は知らなかったのだ旅先でカズキとまた、再会することになるのを

## 6 歩

### 29 番道路

ワカバタウンをでたら野生のポケモンが出てくる。そんなことは常識なのは分かっている。だが目の前にいるポケモンはなんだ？  
普通このあたりには出てこないと思うんだけど？

「……………タジャ？」

そう目の前にいるのはジョウト地方には生息していないはずのポケモン。ツタージャである。イツシュ地方に居たからわかる。目元が特徴的なポケモンだ。

「タジャ」

トコトコ

ツタージャがこちらやってくるので頭を撫でてやりたいなあ〜と思  
ったのでしゃがんでみたのだがその瞬間

「タジャ！」

尻尾で顔をはたかれた。

「っ痛、顔が顔が~~~~~」

~~~~~

あまりの痛さで辺りを転がりまわるゼノン。

「いきなり何するんだよ!!」

「……………タジャ」

大声だしたゼノンにシュンと、頭下げるツタージャ。

「あ、ごめん。いきなり大きな声だして悪かったな。」

ゼノンも悪かったと思ったその瞬間

ツタージャの右手が緑色に輝き、ゼノンの足を殴った。

「……………タジャ」

ごめんなさい。

そう言ってるように聞こえた。

なぜだかわからないがツタージャの目には何かに怯えてるように見える。

「お前、俺のことが怖いんのか？」

「タジャ、タージャ」

ツタージャは首を横に振っていた。

「もしかってお前」

「 やつと見つけた、こんな所で何してるのかなあ〜ツイッター」  
耳障りな声がきこえた。少し太ったおっさんみたいだ。

「タジャ!?!」

ツイッターはとつてもびっくりしている。そして、ゼノンの後ろに隠れた。

( やっぱり )

「おや?君がツイッターを見つけてくれたのかね?」

おっさんがこちらにきずいて薄っぺらい笑みを向けてくる。

「まあ、そんなところです。」

「そうか、それはありがとう。では、ツイッターを渡してくれんかね?」

( 渡す？ ツタージャは ツタージャは こんなに 怯えているの？ )

ゼノンの答えは 一つだ

「 断る！ ！」





## 7歩

ゼノンの一言でおっさんの雰囲気が変わった。

「君はなにを言っているのかね。そのツタージャは私のポケモンなのだよ！それを渡さないと言っのかい？」

「私のポケモン？ふざけんじゃねーよ、ツタージャはこんなにも怯えてんじゃねーかよ」

「それで？私のポケモンなのだから怯えようが関係ないだろう？」

ブチ

「ふざけるな！！ツタージャはお前なんか絶対に渡さない！！」

「やれやれ、どうあっても渡さないつもりか。仕方がない。」

おっさんは腰にあるボールに手を付けた。

「力づくで奪い返すだけだ！行け、ニョロゾ！！」

「ニヨロツゾ」

「いけ！イーブイ」

「ブイ！」

「ツタージャ、お前はどこか安全な場所にかくれてろ！！」

「タジャ！？」

ツタージャは驚いているが今は、それどころではない。

「いいから早く！！」

「・・・タジャ」

（いったか・・・）

「ニヨロゾ、バブルこうせん」

ニヨロゾの口から大量のシャボン玉みたいのが無数にはなたれた。

「イーブイ、かげぶんしん！」

しかしイーブイのかげぶんしんで実体を偽物のイーブイでいっぱいにし、攻撃を免れた。

「でんこうせっか！！」

「ニヨロゾ、受け止めてかわらわりです。」

イーブイの攻撃を受け止められ鋭い一撃が頭に直撃した。

イーブイの動きが止まった。

\*

ツタージヤは思った。なぜ自分のために一生懸命になって助けてくれるのか？

なぜあんなにも自分の為に怒ってくれてるのだろうか？

自分は彼を攻撃してしまったのに。

わからない。

でも、彼の傍にいたい。

自分も一緒に戦いたい。

彼の役に立ちたい。

そう思って私は彼の所に戻って行くことにした。



## 8歩

イーブイが一瞬だが動きが止まった。

だがその一瞬を相手は見逃さなかった。

「ニヨロゾ、のしかかり!!」

「イーブイ、よける!!」

「ブイ~~~~」

イーブイは体に力が入らないようだ。そのためその場を動けなかった。

ドッスン!!!!!!!!!!

「ブ、ブイ~~~~」

イーブイから苦しそうな声が聞こえてきた。

「イ、イーブイ!?!」

「ははは、君がツタージャを渡さないからイーブイが苦しそうだよ。そこを退いてくいたら、イーブイを助けてあげてもいいがどうする?」

おっさんがニヤニヤしながら聞いてくる。

(くそ、ツイッターを助けるためにバトルをしたに、何をやって  
いるんだ俺は)

ゼノンは後悔をしている。トレーナーになって日が浅い彼にとって  
このようなピンチになったらどうすればいいのかわからなくなって  
くる。

「……………」

「さあ早く、イーブイを助けたくないのかい？」

「くっ」

ゼノンはおっさんの言葉に乗ろうかと思った。

だが次の瞬間、緑色の玉がニョロゾに直撃した。

「ニョ、ニョロー!？」

ニョロゾは驚きイーブイから距離をとってしまった。

「な、なんで」

「タジャ」

イーブイを助けたのはツタージャだった。

「なんで来たんだよ!？」

俺のことを放っていたらお前はアイツから逃げられたんだぞ!」

ゼノンはわからなかった。なぜなら人間が嫌いだと思ったからだ。

「タジャ、タジャ、タジャタージャ」

ツタージャは必至でゼノンに言葉を伝えていた

「……………ツタージャは俺を助けに来たのか?」

「タジャ!」

ツタージャの言葉が伝わったのかゼノンは、そう聞いた。

「ごめん。俺、お前を助けようと思ってたんだけど俺の実力が無いばかりに逆に助けられたな。」

「タ〜ジャ」

気にするな。

そう言ってるように聞こえた。

「ツタージャ、俺と一緒に戦ってくれるか?」

「タジャ」



「ありがとう」

ツタージャに感謝した。こんな自分に力を貸してくれるのだから

「ブーイ」

すると、イーブイがボロボロになって近くによつてきた

「イーブイはモンスターボールの中に入って休んでくれ」

「ブイ」

モンスターボールをイーブイに向け赤い光線がイーブイにあたり  
モンスターボールの中におさまった

「はあ〜、君はなんなんだい。ツタージャは私のポケモンだと言  
っているだろう」

「なに言つてやがる。本当に自分のポケモンならモンスターボール  
の中に戻せばいいだろうが。それをしないってことはゲットしてい  
ない証拠だ!!」

「くっ、だがそれがどうした。私がツタージャをゲットすればいい  
だけの話だ!」

「ツタージャは絶対にお前なんかには渡さない。いくぞ、ツタージ  
ャ!」

「タジャ！」

## 8 歩（後書き）

次回、ツイッタージャVSニョロゾ

## 9 歩

「ツタージャ、エナジーボール」

「タジャ」

ツタージャの右手から緑色の光の弾が放たれた。

そして、ニヨロゾに見事に当たった。

「ニヨ、ニヨロ〜〜〜」

ニヨロゾは苦しそうな声を出す。

「な、何をしている。ニヨロゾ、おつふくビンタだ！」

「ニ、ニヨロオ〜〜〜」

ニヨロゾは苦しそうな顔をしてツタージャにおつふくビンタをくりだす

「ツタージャ、かわしてつるのムチ！」

「タジャッ！」

ツタージャはゼノンの指示を聞きつるのムチを放つ

「ニヨ〜〜〜」

「何をしているんだニヨロゾ、速くそいつを叩き潰せ！この役立たずめ！！」

おっさんはそんなことをニヨロゾに言い放つ

「ニヨロゾ」

ニヨロゾは悲しそうな顔した

「おい、お前のポケモンだろ！なんでそんなこと言うんだよ！」

「ニヨロゾ？」

「はあ、あ、君は何を言っているのかな？ツタージャならまだしもニヨロゾは君に関係ないだろう？それともなにか、ニヨロゾのことできみになにかを言われたいといけないのか。君はとてもわがままだね」

「わがままでもいいよ！」

でもな、ニヨロゾはお前のために頑張ってたぞ！」

「ニヨロゾ」

ニヨロゾはなんか知らないがキラキラした目でこちらを見ている。

「はあ、もういいよ。そのツタージャはあきらめるよ」

\*

「はい？今なんて言った」

こいついきなりなに言っただわけわかんねえ  
ツタージヤも変な顔をしてるぜ

「なんでいきなりそんなことを言うんだよ。それに信じられないぜ」  
「それは簡単だよ。ツタージヤを手に入れるだけだったから、ニョ  
ロゾ以外にポケモンを持ってきていないのだよ。だから、この場で  
引いておこうというだけのことだよ」

「……………それを信じていいんだな」

「ああ」

「わかった。なら、ちとっちと行けよ」

「タジャ!?!」

ツタージャは驚いて「こちらを見てくるがそれは後にしよじ。

「それじゃまたね」

「二度とくんない!」

## 9 歩（後書き）

次から更新が遅くなると思います。



10歩

「タジャ」

ツタージヤはどうしてアイツを放っておくのかと聞いたそうだった。

「簡単だよ俺はまだまだトレーナーとして未熟だから変に深入りしないほうがいいと思ったんだ。」

「タジャ」

ツタージヤも納得している

「それじゃもう行くな？」

「タジャ」

するとツタージヤはつるのムチで俺を縛り上げるのだった。

「なにするんだ」

「タジャ、タジャ」

真剣に何か言ってるようだが……

「ごめん。何言ってるか分からない。」

「タジャ」

するとツタージヤはつるのムチで俺を縛り上げる力をあげる

「痛ててて、痛いよツタージヤ」

ハツとなつて縛り上げる力を緩めてくれる

「どうしたんだよ？」

「タジヤ」

「もしかして一緒にきたいのか？」

そんなわけないよな〜

と思っていたがコクリと頷いた。

「マジで？」

「タジヤ」

「それじゃ一緒にいくか」

そう言つてモンスターボールをツタージヤに近づける

ツタージヤはボールにタッチをする

そして、ボールはパカッと開いてボールの中に入って行く



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9836z/>

---

ポケモンと一緒に進もう

2012年1月14日07時48分発行